

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

山吹きや昔庄屋の醤油樽

井上 郁子

(評)山吹きは日本固有の植物で、昔から歌や譬話として語り継がれて来た。家が貧しくて蓑笠の備えが無いことを「山吹き」の歌「七重八重花は咲けども山吹きの実の(蓑)一つだに無きぞかなしきに托して、それとなく心の中を伝えたい」といふ、太田道灌と乙女の逸話がある(虚実の程は不明とされている)が、いきなり「昔庄屋の醤油樽」と詠んだ作者の大胆な発想に驚いた。自分の周囲から次第に遠く眼を向ける発想は、月並でなく永い句歴の積み重ねであろう。この句は「山吹きや」で切れて現代と昔がつながっている、俳句ならではの……で短歌ではこの情景は作れない。伝統の「雅」さはないが如何にも現代俳句らしい句である。

白壁の続く酒蔵花の雨

友草 水月

(評)佐川町に司牡丹という酒造りの老舗があるが、たしか白壁酒造が連なっている

たことを思い出す。坂の上に清源寺があり、附近は公園で佐川町の桜の名所となっている。「花の雨」は風に吹かれて桜の花片が散っている情景。現象を組み合わせて、思い入れを見せず、さらりとありのままを詠んで情景が鮮明な句。

いでたちの白衣たちまち雨遍路

植田 紀子

(評)遍路は四国の田舎の春を飾る特異な情景である。巡礼と混同され易いが全く別のもので、巡礼には季節感はない。土佐藩士武士瑞山は「春雨じゃ濡れて行こう」と云って雨の中をたび出して行った、というエピソードがある。同じ春雨でも立場が違うと、情景も全く異なる、日程も定っていて、変更の余裕もない遍路、雨に濡れても御大師様と同行二人、道中の安全を祈るのみ。

踏青や一鍬ひとくわ土におう

弘瀬うき子

(評)春の畑を耕しているのである。草が根を張り萌えはじめると、打ち下す一鍬ひとくわに力がこもる。だんだんに老境の感懐も加わり大変な思いもする、畑作業は地味ではあるが、作物の成長を確かめながら自分が健康で働けるよるこびを感じる春の土。

花の山窓に引き寄せ憩いけり 刘谷 志津

一村の空を動かす山桜 岡本とも子

遠山の混じる桜も咲きにけり 竹崎 光子

たらの芽の花びんに青む厨窓 川村 博子

ひとたびは空へ吹かるる散る桜 間 浩太

出会う人別れゆく人四月かな 大川 節弥

友達のままでもいいよと春の月 秋田 律子

厨窓風にひとひら花の客 中野 好子

美しい顔のホクロや春の医師 小島 良

葱坊主わき見もせずの孤独かな 森元二美子

餌付け度い米寿の春の野鳥どち 川村こよね

春の夢思いがけなき人の影 津田 くみ

初つばめあいさつ代りの宙返り 葛目 哲郎

連翹やお堀の垣を埋めつくす 森岡 照月

チェンソーの音のどこかで夏に入る 片岡 包女

園児等の声に囲まれ雑祭 筒井 一平

葉桜や郷に活気を失いて 筒井 文

ポケットにある豆菓子や春愁い 伊藤 たみ

静かなる家にはしやぐ児春休み 川村 愛

ねこの爪ひらりとかわす夏の蝶 渡辺万利子

一人逝き一戸が廢る牡丹の芽 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

TEL 867-2133

有料広告

医療法人 森木病院
光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL(088)893-0014

内科
外科
小児科
循環器科
消化器科
リハビリテーション科
人工透析